



創立50周年&今までありがとう
安達東高校特集⑤

安達東高校が製造する第三のみつ「おにばばのみみだ」。その実習風景を見学し、農業コースの養蜂担当の菱沼先生に今までの軌跡やこだわりについて、高校生の方々に実習の感想を伺いました。

安達東高校オリジナル商品「おにばばのみみだ」のこだわりを紹介します！

かわら版
集落支援員だより
いろいろわしる
QRコード

▲高校2年生が第3のみつづくりに取り組んでいます

Q 始めたきつかけは？
数年前に、農業コースの生徒たちと「岩代の特産品を」と考えていた頃、地元の人々の紹介で埼玉にある「第三のみつ研究会」を知りました。ここでは国際規格上、蜂蜜とは呼べない蜜のことを「第三のみつ」と名づけ特許も取得済みでした。埼玉まで生徒と一緒に足を運んでお願いした結果、「安達東高校であれば営利目的ではないので」と特別に第三のみつづくりの許可を頂きました。
製造工程を学びましたが、地元産のりんごジュースを使って応用できないかという思いから試行錯誤が始まりました。何年かは失敗から学ぶことの連続でした。安定して第三のみつが生産できるようになったのは、ここ二年くらいだと思えます。

Q こだわりや苦心点は？
一番のこだわりは羽山りんご



▲「おにばばの涙」1瓶1000円

りんごジュースを使った実習を見学しました

安達東高校では、8月下旬から蜜蜂に毎日りんごジュースを与えています。今回の実習見学では、「蜂ってホント凄い！」「実習楽しい！」「蜂さんに感謝」「最初は怖かったけど、今は蜂が怖くありません」「第三のみつ、美味しい」など、生徒5人の皆さんから楽しいコメントをいただきました。

★シーン1/巣板を一枚ずつチェック★



▲巣箱を解体し、1枚ずつ巣板を確認。蜜ろうなど不要なものはこそげとり、巣箱に戻します

★シーン2/女王蜂探し★

◀生徒さん一人一人に巣板を手渡し、女王蜂がいるかどうか確認（いなくなったり、死んでしまうこともあるそうです）



★シーン3：りんごジュースを与える★



◀仕切り板中の専用の容器にりんごジュースを注ぎます。蜂が溺れないように、少しずつ注ぐのがポイントです！

▶煮詰めたりんごジュースは茶色に変化します



岩代を愛する人がすすめる魅力あるスポットを紹介。十八回目は杉内の佐久間清一さんです。



▲杉内地内の坂の上からの山々と空の眺め

～岩代観光協会ホームページ～
“空キャン”を紹介します

岩代観光協会のホームページがリニューアルされました。「コロナ禍でますます利用が増えている日山キャンプ場の魅力を伝えたい」という小浜在住の元地域おこし協力隊、武藤琴美さんと現地域おこし協力隊の有野真由美さんの発案によるもの。

ふたりが現地直接キャンパーに取材を行い、“空キャン”というページでリアルな声を紹介しています。写真も鮮明で日山の自然の美しさ、キャンプの楽しさが伝わってきますので、ぜひ覗いてみてください。



▲「空キャン」は「天空のキャンプ場」というイメージにちなんで名付けられました。2022年春からスタートし、夏、秋、冬バージョンと登場する予定です



◀岩代観光協会HPの「空キャン」ページのQRコードが付いたカードも制作。日山キャンプ場受付、名目津温泉窓口、さくらの郷食堂入口、岩代支所入口などに置いてあります

私の家は坂道を登り切った高台に位置し、地元の人々の散歩コースになっていきます。家の前の道路をはさんだ土手からの眺めが素晴らしい、日山や羽山をはじめ雄大な山並み、大きく広がる空と眼下の緑のコントラストが目を楽しませてくれます。早朝、雲海が見られることもあります。昨年、土手に椅子や丸太のベンチを設置しました。「十年は長生きできる」と地元で讃えられるこの場所に住んでいることが自分でも誇らしく、散歩を楽しんでいる人もゆったり景色を眺めてほしいと思ったからです。そしてこの場所の魅力は景色だけではなく、私の家の



真後ろには、「小僧壇」と呼ばれる遺跡があります。「その昔、小僧を生き埋めにした場所」と祖父から聞かされてきましたが、かつての辺りに「さいかちの城」と地元で呼ばれるお城があった頃の出来事とされています。初日の出を眺めに来る人もいます。伝説が残る風光明媚なこの場所を岩代より多くの人に知ってもらえたら嬉しいです。

◇紹介してくれた方◇
杉内在住
佐久間清一さん



「家の横には地神社があり、石段の横には古い道標もあります。昔は岩角山へお参りに向かう巡礼路になっていた歴史ある場所です」。



▲佐久間さん宅裏の小僧壇

岩代の歴史シリーズ

「渡邊閑哉と安積疏水」 ②

岩代小浜の歴史と文化を護る会
顧問 松本 誠一

下長折村を流れる移川は、大雨のたびに氾濫を繰返し、耕地を押し流し大きな被害を与えていた。閑哉は九州を見聞した際、河川護岸保全のため、竹の植栽が効果あることを思い出し、九州から台明竹を取り寄せ、河川両岸に植栽することをすすめ、洪水による氾濫から農地を守ることができた。村民は被害を防ぐことができたことを喜び、以来、この竹を「閑哉竹」と呼ぶようになった。

また、たびたび発生する自然災害による凶作に、食糧の確保をはかるため、須賀川地方で栽培する良質の「じゃが芋」の種を買入れ、村民に作付けをすすめた。村民は、保存のきく食糧の確保に感謝し、以来、この「じゃが芋」を「閑哉芋」と呼ぶようになった。嘉永二（1849）年、閑哉五十一歳で鈴石村名主を拝命する。当時、鈴石村では、前名主大内一郎の放漫な村政運営により、村に莫大な借金をつくり、名主の排斥騒動に発展し、その後任に任命されたのである。

ここでも数々の困難を乗り越え、村は明るさを取り戻したのである。安政五（1858）年、閑哉は六十歳になり、下長折に戻り隠居して閑哉と名乗った。